

日本のエリートスポーツシステムの成功要因：

エリートアスリートのエリートスポーツ環境の評価による検討

スポーツビジネス研究領域

5010A078-3 舟橋 弘晃

研究指導教員：間野 義之 教授

1. 緒言

「グローバルスポーツ軍拡競争」(Oakley and Green, 2001) と呼称されるように、過去数十年にわたって、オリンピックをはじめとする国際競技大会における国家間のメダル獲得レースは明らかに激化し、国際競技大会において輝かしい成績を収めることは、多くの国にとって重要性を増している。近年では、政府が財政支援という形で、スポーツ組織や競技団体の国際競技力向上施策に直接介入し (Green and Houlihan, 2005)、エリートスポーツシステムの制度化が促進されている (Bergsgard et al., 2007)。

エリートスポーツシステムの下位概念であり、システムがつくりだすアスリートを取り巻く競技環境をエリートスポーツ環境 (van Bottenburg, 2000) と言う。アスリートは社会から孤立しているわけではなく、非常に複雑な社会・組織環境の中で活動しており (Hardly et al., 1996)、良く整備された環境がアスリートのパフォーマンスに大きな影響を与えるはずである。De Bosscher et al. (2008; 2009) は、エリートスポーツシステムを客観的に定量化することが困難である項目を評価するために、エリートスポーツシステムのプライマリユーザに対する調査として、エリートアスリートとエリートコーチに対してエリートスポーツ環境調査を実施している。つまり、エリートスポーツシステムの消費者的観点 (De Bosscher et al., 2009) からエリートスポーツ環境を評価することによって、エリートスポーツシステムの成功要因を検討することが可能である。

そこで本研究では、エリートスポーツシステムの最も重要なステークホルダーであり、一定の競技成績をあげているエリートアスリートに対して、エリートスポーツ環境に関する調査を実施することにより、日本のエリートスポーツシステムの成功要因を検討することを目的とする。さらに、エリートアスリートを競技成績に応じて分類し、エリートスポーツ環境の評価の差異を明らかにすることにより、国際競技大会におけるメダル獲得を規定する政策的要因についても検討する。

2. 方法

2.1 調査対象者と手続き

エリートアスリートに対して、集団調査法と郵送法による質問紙調査を実施した。競技団体ごとに調査日を調整し、

ナショナルチームの強化合宿中、JISS における「アスリートチェック」の際などに配布回収した。105 通 (実配布数 155 通、回収率 69.5%) の有効回答が得られた。エリートアスリートの定義は以下のように設定した。1) チーム「ニッポン」マルチサポート事業の夏季ターゲット競技、2) 北京五輪以降の国際競技大会 (オリンピック、世界選手権など) ベスト 16 以上の競技成績、3) 現役選手 (計 205 名)。

2.2 測定項目

調査には諸外国エリートスポーツ政策の専門家によって共同作成された質問紙を用いた。調査内容は基本属性 (性、生年、専門競技、競技成績、学歴)、ならびにエリートスポーツ環境とした。エリートスポーツ環境は、各国のエリートスポーツ政策の専門家によって抽出された 9 つの Pillar におけるエリートスポーツシステムの主要成功要因 (CSF) 126 項目より、エリートスポーツ環境を主観的に評価できる 7 つの Pillar における 21 CSF, 56 項目を用いた。Pillar 5 は、現役中と引退後のサポートの意味合いの違いを考慮するために、「競技サポート」と「ポストキャリアサポート」に大別し、それぞれ Pillar 5 (a), Pillar 5 (b) とした。なお、「財政支援 (Pillar 1)」と「スポーツ参加 (Pillar 3)」は対象が主観的に判断できる Pillar ではないと判断し、評価項目から除いた。

2.3 解析

スコアリングシステム (De Bosscher et al., 2009; 2010) を用いて各 Pillar の評価得点を算出した。次に、競技成績別のサブ分析として、解析対象者を国際競技大会においてメダル獲得の経験があるエリートアスリート (Elite α)、獲得経験のないエリートアスリート (Elite β) に分類し、エリートスポーツ環境の総合評価を従属変数、競技成績を独立変数とする独立サンプルの t 検定を行った。さらに、スコアリングシステムにより、Elite α と Elite β における各 Pillar のスコアを算出した。

3. 結果

3.1 各 Pillar のエリートスポーツ環境の評価

「タレント発掘・育成システム (Pillar 4)」、 「競技サポート (Pillar 5(a))」、 「トレーニング施設 (Pillar 6)」、

および「コーチの確保・養成 (Pillar 7)」の環境はとてよく整備されているという評価であった。「国際・国内競技大会 (Pillar 8)」はとてよく整備されているという評価であった。一方、「スポーツ政策の組織体制・構成 (Pillar 2)」と「医・科学研究 (Pillar 9)」の環境はある程度整備されているという評価にとどまり、「ポストキャリアサポート (Pillar 5(b))」の環境はほとんど整備されていないという評価であった (表 1)。

表 1. 各 Pillar のエリートスポーツ環境の評価

Pillar	評価得点 (%) (n=105)	評価
1. 財政支援	-	-
2. スポーツ政策の組織体制と構成	65.5	C
3. スポーツ参加	-	-
4. タレント発掘・育成システム	87.5	A
5(a). 競技サポート	95.0	A
5(b). ポストキャリアサポート	33.3	E
6. トレーニング施設	100.0	A
7. コーチの確保・養成	87.5	A
8. 国際・国内競技大会	74.3	B
9. 医・科学研究	66.7	C
【評価基準】		
環境がとてよく整備されている	84.1-100%	A
環境がよく整備されている	68.1-84.0%	B
環境がある程度整備されている	52.1-68.0%	C
環境があまり整備されていない	36.1-52.0%	D
環境がほとんど整備されていない	20.0-36.0%	E

※Pillar1, 3はエリートスポーツ環境調査においては未測定項目

3.2 エリートスポーツ環境の総合評価とメダル獲得との関係

Elite α と Elite β の間でエリートスポーツ環境の総合評価に有意な差は見られなかった (t-test, $p < 0.05$)。

3.3 各 Pillar のエリートスポーツ環境の評価とメダル獲得との関連性

Elite α と Elite β の間で評価に大きな違いは確認されず、差異が明らかとなったのは Pillar 9 のみであった。Elite α は環境があまり整備されていない、Elite β は環境がある程度整備されているという評価であり、Elite β の評価が高値を示した。

4. 考察

エリートアスリートのエリートスポーツ環境に対する各 Pillar の評価を算出した結果、Pillar 4, Pillar 5(a), Pillar 6, および Pillar 7 の 4 ちの Pillar において環境がとてよく整備されているという評価であった。エリートアスリートによって高値に評価されたこれらの Pillar は日本の国際競技力における競争優位の源泉である可能性が示唆される。Pillar 5(a), Pillar 6, Pillar 7 は De Bosscher et al. (2009) による 6 カ国 7 地域におけるエリートスポーツシステムの国際比較研究においても成功要因であると報告されており、日本においても視点は違うものの同等の結果が得られた。ジュニアの強化選手として競技団体から特別待遇やサポートサービスを受けた 64 名 (63.8%) の平均年齢は 16.5 ± 3.0

歳であった。これらのデータから、平均的なエリートアスリートは高校期より競技団体によるサポートや、学校機関の特別待遇を受けていた可能性があり、Pillar 4 の評価が高値になったものと思われる。また、本調査の対象選手の 86.7% は、ナショナルトレーニングセンター、NTC 競技別強化拠点を常時利用することができ、オリンピック強化指定制度「アスリートプログラム」やマルチサポート事業により、情報戦略・医学・科学・栄養・コーチングスタッフなどの包括的なサポートを受けている選手であった。そのため Pillar 5(a), Pillar 6, Pillar 7 は高く評価されたものと思われる。

環境があまり整備されていないと評価された Pillar 5(b) は、日本が競争優位を得るために環境整備の余地がある未発達領域であることが示唆される。この結果は、吉田ら (2006; 2007) の研究で明らかとなったセカンドキャリア対策の必要性を支持する結果である。ポストキャリアサポート専属のスタッフが欠如していることや、デュアルキャリアの文化がないことが理由として考えられる。

エリートスポーツ環境の評価とメダル獲得の関連性を調べるために、Elite α と Elite β のエリートスポーツ環境の総合評価について平均値の差の検定を行った結果、両者には有意な差は認められなかった。さらに、スコアリングシステムにより、Elite α と Elite β の各 Pillar におけるエリートスポーツ環境の評価を算出した結果、Pillar 9 のみ差異が確認された。したがって、エリートアスリートにおいて、メダル獲得とエリートスポーツ環境の総合評価には関係がなく、各 Pillar の評価においても明確な関連性はないと判断された。メダリストが必ずしもよい環境下にいるわけではなく、エリートアスリートは同水準のエリートスポーツ環境下で活動をしていることが考えられる。また、一定の競技力を有する集団をさらに競技成績で群分けしても、政策レベルの評価では明確な違いが観察されないことを示唆している。これは政策レベルの研究の限界と言え、国際大会におけるアスリートのパフォーマンスを規定する心理学的要因などのアプローチ (Gould et al., 2002) からの検討が必要であろう。

5. おわりに

本研究では、エリートアスリートのエリートスポーツ環境の評価を定量化し、日本のエリートスポーツシステムの成功要因を分析したことにより、今後の国際競技力向上施策における一考察を可能とするものであった。ただし、スコアリングシステムはあくまでエリートスポーツシステムを目に見えるようにする方法である (De Bosscher et al., 2010) と述べられるように、本研究のみの知見から日本の国際競技力を規定する政策的要因を結論付けるのは早急であり、エリートスポーツシステムの定性記述との組み合わせや政策的な転換と結びついた縦断研究が強く求められる。